



小田小だより

平成29年10月号

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号 Tel 045(775)3011

<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/>

横浜市立小田小学校



「愛育」の原点

～さつきちゃんのお母さんに学ぶ～

学校長 木村 昭雄

私が教員になって初めて担任した2年生のクラスに、さつきちゃんという女の子がいました。さつきちゃんは2年生の10月にお父さんを亡くしました。お母さんと5年生のお兄ちゃんの3人家族になってしまったのです。お通夜の席で、二人はお母さんに抱きついてぼろぼろと涙を流していました。

それからのさつきちゃん一家は、お母さんが働かなければなりません。家から少し離れたお店で働くことになりました。そうしたらさつきちゃんが不思議な行動を取り始めたのです。1時間目の授業が終わると、必ずベランダに出て行くのです。そんな日が毎日続いたのです。窓越しに見ていますと、さつきちゃんは、校門の方に向かって、胸の前で小さく手を振っているのです。校門の前では、お母さんも手を振っておられました。5年生の担任にこのことを話すと、お兄ちゃんも同じことをしているとのことでした。

ある日の夕方にさつきちゃんの家を訪問して、そっと尋ねました。お母さんは、「二人とも、きつとさみしい思いを引きずっていると思います。でも、いつまでもそんなことは勉強にも身が入らないのではないのでしょうか。それを乗り越えるしかありません。悩んだ末に、三人で約束したのです。学校に行くときは、『行ってらっしゃい。お母さんも頑張るから、あなたたちも頑張るね!』と送り出し、仕事に行く途中に校門の前で二人に手を振って励ますことにしたんです。夕方は、『ただいま。お母さんは頑張ったよ。あなたたちも頑張れたかな?』と声を掛け合っています。」と話してくださいました。

さつきちゃんを担任したのはこの年だけでしたが、毎年年賀状が届くようになりました。あれから38年。昨年12月。年賀状に代わって「母が74歳で永眠いたしました。」という訃報を知らせる葉書が届いたのでした。

親子の関係、家庭の在り方、子育てと愛について考える時、また連日のように報道される家庭内の悲惨な事件の報道に接する度に、この家庭、さつきちゃんのお母さんのあり方を思い浮かべます。素朴で誠実な愛こそが求められているように思えてなりません。

実は、私が教員になりたての頃には盆と正月に帰省して、母に自分が受けもっている学級の子どもたちの写真を見せておりました。独身時代の母は教員をしていたこともあり、子どもたちの写真を見るのがたいそう楽しみだったようです。そして、一人一人の子どもたちの顔を指さしながら「この子のいいところはどこ?」「この子は今、何をがんばっているの?」と聞いてくるのが常でした。さつきちゃんの話をしたときには、「さつきちゃんもお兄ちゃんも、お母さんにとっては宝物だから、お前もうんと大事にしてあげなよ・・・」と言われたのです。

あれは東京オリンピックがあった年でしたから、私が小学校2年生のときのことです。母の教え子たち数人が我が家を訪ねてきました。母は、私と兄を正座させ、「我が家の宝物の昭雄と重雄です。」と紹介したのです。母に「我が家の宝物」と言われ、恥ずかしいと思うと同時に、たいへんな喜びを感じたのを今も覚えています。自分たちのことを「宝物」と言ってもらえたのはたった一回でした。しかし、思い返せば、父母の言動からはいつもそれが感じられ、いつしか私と兄の心の支えになっていたように思います。

それ以来、さつきちゃんだけではなく、自分が担任する子どもたちは皆、「保護者にとっては宝物」「私にとっても宝物」という思いをもつようになりました。

物も豊かに、生活も便利に、そして長寿社会になりました。老いも若きも漂流状態ではない家庭、地域、日本にしたいものです。愛を伝え合う、愛を確かめ合う原点は、愛を「名詞」ではなく、「動詞」として「行為」で表すことではないでしょうか。